論壇

戦後三十年

小林健三

一　復刊版のブーム

戦後三十年を経過し、この間、目立った学界動向や研究の状況を考察してみることにする。

まず第一は復刊本のブーム現象で、学界にも係わりをもつ。終戦後、新制大学が発足し、それにつれて、大学図書館の数も急激にふえた。戦後、写真印刷が発達し、この技術を使って、名著の復刊が出版界の注目をあび、稀覯本の復刊が始まった。『日本教育史資料』（全九冊）『神道叢書』をはじめ、加藤博士編『神道書籍目録』（上・下二巻）などの大著がつぎつぎと復刊された。ゼロクスによるリコピーも発達し便利となった。平凡社の『神道大辞典』（三冊）もこの系列に入る。本書は昭和十五年、すなわち紀元二千六百年を記念して平凡社社長下中彌三郎氏が、それより五、六年前に一旦刊行に着手したが、何としても出版の見込みが立たず、そのままに過ぎていたのを、思い切って断行された一大英断の大出版ということであった。第一巻の巻頭に下中氏の「神道大辞典を世に送る」という序文がついている。歴史的な文章であるので、主要部分を次に引用する。

「日本は神国である。政治、経済、教化、みな祭祀を根柢とせぬはない。然るに今日、国民の神祇に関する知識と理解は必ずしも十分とは言へない。郷村には必ず神社があり、四時必ず祭が行はれる。けれども、その祭神が何であるか、その由緒は、といふことになると明白でない。宵祭には夜店が賑はひ、祭の日には御輿が出る、山車が出る、神前に儀式があり、神楽が奏せられる。けれどもその意味が国民に徹底してない。国民に徹底してないばかりでなく、国民精神指導の地位にある人々の間に於てすら、その認識が極めて不十分である。洵に遺憾千万であるが、しか

し我等はこの事実を咎める前に、一応篤と考へて見なくてはならないのは、国家としても社会としても、徒らに外国文化の吸収に急なる余り、神道研究に関する指導奨励を怠ってはゐなかったかといふことである。一例を申せば、仏教・基督教には、すでに浩瀚なる大辞典が刊行せられてあるに、神道研究の手引となるべき辞書としては、僅かに十五年前我社刊行、山川鵜市氏著の神祇辞典一書あるのみである。これ取も直さず、神道研究に関する国家的社会的用意の不十分を物語るものではないか。

山川氏の神祇辞典は好著たるを失はぬが、規模が小さい。大辞典の必要は専門諸家の間に於て夙に考へられてゐたのである。ただ出版の困難を思うて容易に着手し得られなかったのである。我社に於ては、その間、宮地直一先生、佐伯有義先生の御慫慂もあり、五六年前、一旦刊行に着手したが、何としても出版の見込立たず、そのまま過ぎてゐたところ、一昨年春、二千六百年大祝典記念の出版を計画するに当り、その一つとして遂に此の神道大辞典の刊行を決意し、斯道諸大家総協力の下、編纂刊行の事を進め、幾多の困難を克服して、愈々茲に第一巻を世に送ることとなった次第である。初め三巻の予定を漸次拡大して全五巻としたのも一にその完璧を期せんがためである」（下略）（原文のまま）

この大辞典は第三巻（ト～ワ）を昭和十五年九月に発行したが、それ以後全五巻を完了したかどうか。この大辞典は宮地博士が采配をふり、旧東大文学部神道研究室の溝口駒造氏が責任編集の任にあたられたと聞く。

つぎに復刊のピークはなんといっても明治歴史学の巨大な遺産といわれる『古事類苑』全五十一冊の復刊をあげなくてはならぬ。本書の着手が明治十二年、終わりが大正三年、前後延々三十五年にわたる国家的大事業で、まさに空前絶後の歴史百科全書である。息の長いこれほどの大出版は、明治の学者たちによって見事に完成された。昨五十一年十月からその普及版（全五十一冊）が扱い易いコンパクト造本で刊行中である。これと並んで著名な『広文庫』と『群書索引』（物集博士父子二代にわたる）も復刊された。この膨大な著作、出版のため物集博士は全財産を投じたという。出版を引きうける書店が当時なかったからである。

明治の学者は偉かった！　なぜかかる大事業をなしえたのであろうか。その理由を解明して、これにつづく仕事を完成させることが二十一世紀に望まれよう。

先人の業績を復刊するのは現代では購入者の範囲（とくに大学図書館）の見通しがつけば、割合に簡単である。しかし復刊本ばかりが流行して、独創的なライフ・ワークがあまり出ないのは感心できない。復刊本の流行を見るにつけても、現代学界の空しさを感ぜずにはいられぬ。それは結局、学者たちの姿勢に関することではなかろうか。

二　頌寿記念出版のこと

もっとも、こうは言っても、戦後生まれの新制大学は旧制のそれとは根本的に性格が違い、新制大学は主として高等教育の学校であり、大学本来の研究を目的とする機関ではない。そのため大学の教授たちは、旧制中学卒位の大学生を引きうけてテキストの講義に多忙をきわめる。従って研究時間がない。そのため本務に忠実であればあるほど余裕がない。これは大学のシステムが性格を変えたからに他ならぬ。

しかし、その教授も停年退官の前に〝最終講義〟という花道が用意され、全学挙げてこの講義を聞き拍手を送る。国立・公立・私立を問わず、この慣例がつづけられていて、美わしい大学風景である。それとともに、私学では、教授の還暦・古稀を祝って教え子たちが発起して祝賀の宴を開き、記念出版を刊行する。それによってその大学の学風が判かる。伊勢の皇大の学風についてはその一端を「神道史研究」（久保田博士追悼号）に載せたから省略し、ここでは国学院大学について略述しよう。（国学院雑誌は広島にいたころ、原爆のため研究室に置いた雑誌類とともに、焼失したため勢い調査未了であるが）、最近の記念出版物だけを略述しよう。

昭和四十五年十月**岩本徳一博士**の還暦記念に『神道祭祀の研究』（A5三三一ページ）が角川書店から刊行された。前編「神名帳より観たる上代文化」後編「神道祭祀の研究」（学位論文）よりなる。前編は延喜式撰上一千年を契機として金剛寺本・武田本『延喜式』神名帳等が発見された昭和十五年前後の執筆、後編は資料編を後日に譲って、神道祭祀の原初形態からその構成要素にふれ、類型的研究を主流に、神観念・祭神交替の問題に論及し、さらに神道祭祀の複合的性格を詳述し、日本における社会構成の発展経過とそれに伴なう信仰的統合の問題を体系づけたもの、前編から後編まで二十数年にわたる一つの問題の追及である。「学問とは生涯を賭けるものであり、その研究においては常に一貫したものでなければならないと信ずる」（序文）とある通りで、博士のいう「より本質的なものを基盤として理論神道学・実践神道学は体系化されるべきである」

との信念の今後達成されることを心から祈ってやまぬ。

昭和四十七年九月**安津素彦博士**の還暦記念に、『神道思想論叢』（A5七四七ページ）が白帝社から刊行された。博士にはすでに『神道と祭祀』（昭和十六年）佐藤信淵集（『国学大系第十二巻』（同十八年）『近世日本思想史』上―直毘霊を中心とせる諸論争―（同年）『神道思想史』（同二十六年）『神道概論』（上）（同二十九年）『日本人の宗教心意』（同四十年）『国旗の歴史』（同四十七年）などの主要著書があるが、還暦記念出版は『神道思想論叢』の書名が示す通りに論文集であり、㈠古代思想断章 ㈡古事記の神観 ㈢祝祠考試論 ㈣上代氏族論の課題 ㈤神仏交渉史点描 ㈥中世神道思想攷 ㈦国学論私説 ㈧現代神道の諸問題の諸篇から成っている。いずれも該博な博士の造詣の一端を物語る論文集で、まさに万学総合の趣きが見えるが、「神道学の重要な一端を担っている安津博士には、体系的なものを示してほしいと期待しているが、今般編纂される『神道思想論叢』は、やがて私の期待しているものが生まれてくる過渡期のものとして興味深い」（小野祖教博士推薦文）という感じもしないではない。

次は古稀記念出版である。

昭和四十九年十月**小野祖教博士**の古稀記念の祝賀会が明治神宮参集殿で盛大に行なわれ、古稀記念論文集（三十五氏執筆A5六四〇ページ）『神道教学論攷』・『小野祖教伝―神道教学に生きる』（A5一〇二ページ）が刊行された。後者の巻頭には「わが人生を顧みる」という自叙伝が掲載されていて、博士の足あとが要領よくまとめてある。このなかでは「鈴木大拙氏との論争」「神道宗教学会の基礎固め」の項が光っている。次に座談会の記録（教学のための戦い）、博士の略年譜、その学績、著書論文一覧、次に教学の歴史の文献から、として「敬神生活の綱領」「道のはじめ」「み光を仰ぐ」「本庁の教化の灯」の四項目が収めてある。

博士の学位論文は『座の研究』（昭和二十七年提出・未刊）であるが、「一般に見られる民俗学的傾向のものと異なり、考証学を用いて、文献的証明を求めながら、座及び座に関係ある用語をあらわす内容の変遷や多様性を究明した。問題を官制、寺院制、大社の社制に求めているのも、この研究の特色である。この分野の研究は、いまだ集成されていないが、神職論に発展しつつある研究が集成される日を待望したい」（安藤直彦氏）とあるので見当がつく。『神道思想名著集成』（上・中・下）も労作の中に入る。「本書は博士の神道思想史研究、古典、古語研究の中から生まれたもので、神学と神道思想史とをつなぐための

重要な仕事といわれ、八十余の神道思想史の古典を千五百ページに収め、複雑な思想の流れを掌の中に置いて見ることができるようにした。但し、やがて『日本思想大鑑』をつくるための中間的なもので〃試刷〃という名が冠せられている。この『集成』では『神道五部書』『日本書紀纂疏』『土徳篇、未生土伝』『東家秘伝』等、今日まで難解、難読の書とされた諸書の書き下ろしが試みられている」（安藤直彦氏）

古稀記念出版が『象徴天皇―日本人の原点から見る―』（B5二四二ページ）と題する大著である。大学紀要にのせた三論文に新稿「象徴天皇と明御神」「神道の分類・分析と神国論的国体論の構造」の二論文を加えたもの、昭和四十九年十一月東京の浪曼社から刊行された。巻首に著者の序文が見えるが、主意は「事実が意味を決める」という深重な哲学的表現によってよく判る。書きだしにいう。

「わたしは、終戦の玉音放送を忘れることができません。マッカーサーが進駐してきた時のことが。「敗戦」「無条件降伏」世の中が真っ暗になるほど、いやな言葉でした。絶望しました。

その時、みんなが考えたのは、天皇さまのことでした。天皇さまだけは残っていただきたい。とにも角にも、天皇さまだけは残ってほしい。それを国体の護持と云いました。この国民の悲願は何であろうか、と考えて見ました。答は簡単に出ました。「天皇は、日本国不滅の証（あかし）である」でした。戦争に敗けたと言うことと、国が亡びるということを別にしたかったのでした。亡びなかったことを、納得させてくれるものは、万世一系の天皇さまの御無事しかなかったのでした。」

これで本書の全容がつかめると思う。本書の巻頭論文「象徴天皇と明御神」の一文は七〇ページに及ぶ労作であるが、とくに象徴天皇と祭祀権の条では、これからの問題点として皇室典範の改正をあげ、戦後施行された皇室典範には祭祀に関する事項の削除がある。だから、今の皇室典範は完全な皇室典範ではない。皇室で一番重要な祭祀の規定を欠く、目玉のない皇室典範である、といい、第二章践祚即位の条文、

第十条　天皇崩レルトキハ皇嗣即チ践祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

第十一条　即位ノ礼及ビ大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

をあげ、「神器」の継承は間接ではあるが「皇室経済法」第七条に見えるが、大嘗祭については全く規定がなくなったことを指摘している点が注目される。著者は、このあと「大嘗祭と天皇祭祀権」の問題に言及し、最後に、

「天皇が象徴であると定められたことは、天皇の制度の終わりではなく、まだ開かれなかった天皇のいくつかの面があらわれて来るはじめでなければならない。象徴天皇制はある意味で、新しい天皇制のはじめである。扉を開くのは国民である」と意味深い言葉で結んでいる。

なお、これと連関があるので、田中初夫博士の大著『践祚大嘗祭』（二冊）研究篇（B5三七〇ページ）および資料篇（写真複写・B5二四七ページ）をあげておく。昭和五十年五月東京木耳社刊、著者のライフ・ワークで画期的労作。

次に昭和五十年十月、**岸本芳雄博士**の古稀祝賀会が明治神宮参集殿で行なわれた。『岸本芳雄先生略年譜並著作論文目録』（A5六七ページ）が頒布され、『論集　近世先哲の神道観・教育観』（A5一七三ページ）相川書房版が右と合わせて記念出版として頒布された。

博士の学風は恩師河野省三博士の国学の研究を受けてこれをさらに教育史の分野に一新生面を開いたと申すことができよう。昭和三十四年七月『国学者の思想と教育―国学の教育史的考察―』（B6一九八ページ・新思潮社刊）を縮刷版とすれば、昭和三十七年十二月明治図書から刊行された『近世神道教育史―江戸期における神道の社会教化的意義―』はその全容を示す大著である。本書は昭和二十年の暮、『近世神道教育史攷』（学位論文）としてまとめたものをさらに推敲を重ねて出版されたものである。本書は本文A5二九二ページであるが、それに続けて『近世神道教育史』の後に、と題し、河野博士の十二ページに及ぶ長論文がついている。そして二九三ページには、写真が一葉掲載されていて説明に「恩師河野博士（左）と著者」とある。この跋文をかかれたときの河野博士は、満八十歳の寿齢を迎えられたときである。著者は五十八歳、本書ができるや否や著者は埼玉県騎西町の恩師のもとに一本持参して謹呈し、喜ばれたという。著者は倫理学の教科書のような篤実温厚な君子であり、古稀記念写真にも円熟の相がよく見えて奥ゆかしい。几帳面な性格で陰険さがない。講義は懇切丁寧であくまでも思いやりの心を忘れぬ。河野省三博士の温容をそのまま再現した感じである。

岸本博士とは玉川版『日本教育宝典』（八巻）の編集委員の一人として長い間お世話になった。昭和四十年博士編集の『本居宣長・平田篤胤集』（一巻）が刊行された。それから一年たって昭和四十一年四月国学院大学栃木短大教授となり栄転された。（教学部長・同一般教育科長）

博士の業績は古稀祝賀会から刊行された『略年譜並著作論文

目録』に詳しい。至れり尽せりの詳細な記録である。記念出版の『論集　近世先哲の神道観・教育観』は九つの論文を集めたものであるが、筆者としては第八、第九の二章の論文の独創性に注目したい。すなわち一は神道と幼児教育思想（山鹿素行と佐藤信淵）、一は明治以前の幼児保育と保育思想であり、いずれも前人未発の研究である。すなわち従来日本の幼児教育ことに保育施設としての幼稚園の発達は、明治以後、外国からの移入によるものとみなされていた。果して、日本人は明治以前においては、幼児については、幼児の教育ないし保育については無関心であったのであろうか？　こうした通説に対する反論として書かれたものであり、著者の教育史の造詣の深さがうかがわれる。著者が玉川大学で教育史を講ずること、十四ヵ年に及ぶ。この期間に、教育史に関する研究が進展したことがうかがわれる。四十八歳から六十二歳にわたる働き盛りの時代で『日本教育史』（A5三一七ページ・玉川大学通信教育部刊）はその置き土産であった。

三　学界状況(一)

つぎに国学院大学日本文化研究所の活動について略述しよう。

前向きの姿勢で神道を軸として広く日本文化の宣揚を果たすのがこの研究所の使命であるが、そこに国学の新しい展望が期待された。発足当時の現代神道研究会は、きわめて活発であり、その前途が嘱目されたが、最近は毎年「紀要」を刊行するとともに、斯界の大家を招いて公開講演会を開く程度である。

この研究所の業績として二つをあげることができる。『神道論文総目録』（昭和三十八年九月刊　A5七五五ページ）一冊がそれであり、『神道要語集』（二巻既刊）の刊行がそれである。前者は加藤玄智博士の主宰した明治聖徳記念学会の総力をあげての大事業『神道書籍目録』（上下二巻）に次ぐ労作で、河野省三博士の指導下に『神道要語集』の編纂過程の中から生まれたもの、昭和三十二年に開始され六ヵ年の歳月を費やして昭和三十八年九月、明治神宮社務所から「非売品」として刊行されたものである。同年九月一日づけの甘露寺受長宮司の序文がその経緯を語っている。本書生みの親である河野省三博士は、この編纂の完了を待たれながら同年一月八日帰幽されたことは痛惜の限りといわねばならぬ。本書の原稿が完成し、その出版を明治神宮が引きうけられたことも、加藤博士の『神道書籍目録』を出版された明治神宮の先例にならわれたことと思われ、真に感激のほかはない。分類篇・人名篇・附篇（雑誌目録・件名索引）の三篇から成る

完璧の「論文目録」であり、加藤博士の『書籍目録』とならんで、まさに国家的大事業と申して差支えない。それから今日まで十五年を経過した。この間に発表された論文も多いと考えるが、研究所としては、その続篇をつぎつぎと刊行する必要はなかろうか。『神道要語集』は「祭祀篇二」（A5三六〇ページ）を昭和五十一年五月刊行した。東京大神宮内神道文化会から「非売品」として。

以上の二点は、この研究所の総力をあげての一大労作であり、後代にのこる大著と申したい。

これと連関して、昭和学界の金字塔といわれる『式内社調査報告』（全二十五巻予定一巻平均五百頁）の企画と第十一巻「東海道6」がこのほど皇大出版部から刊行されたことをあげたい。式内社の現状（昭和五十年代）を正確に記録するのが目的であるから、その価値は不朽である。いうまでもなく式内社は一千年以上の古社であり、民族固有の信仰を基盤として今日もなお崇敬されている事実は、世界に例を見ないことで万世一系の皇統を伝えているわが国であればこそと申して差支えない。斎部広成がいう「我が国家は神物霊蹤、今に皆見存し、事に触れて效有れば、虚とは謂ふべからず」（『古語拾遺』）の言を思いださずにはいられない。式内社研究会は全国の神道家、神官、郷土史家を会員とする国ぐるみの組織で、皇大と国大を中心として結成された会で、滝川政次郎博士を会長に、皇大文学部長田中卓博士を理事長として昭和四十九年七月発足したものである。この国家的大事業に対して、三菱財団が進んで助成者になったということも美談と称すべきであろう。昨年発表された松下電器相談役、松下幸之助氏（全国神社総代会会長）肝入りによる『神道大系』（全百三十巻）の編集と刊行も、昭和学界の金字塔と称するに足りる大出版となろう。会長松下幸之助、副会長坂本太郎、常務理事西田長男、理事六名ほかに顧問・参与・監事を揃えた陣容の下に、十年計画で完了する見込みであり、五十二年秋には第一期二十巻が刊行される予定という。（神社新報五十年十二月二十四日による）

それとともにつけ加えておきたいのは、昭和三十三年九月神道学会から世に送られた千家尊宣先生還暦記念『神道論文集』（A5九六二ページ）一巻のことである。このとき千家氏は出雲大社教管長であり、国学院大学理事を兼務されていた。神道界にあってもこれほどの大論文集は戦前、戦後を通じて皆無と申して差支えないが、附録に「神道学会のこと」の記事があり、「神道学」の前身「出雲」に掲載された創刊号から第八号に至る論文要目が載っている。戦後混乱のさなかに鎌倉鶴岡八幡宮の宮司だった座田司氏氏が、占領政策のもとに逼塞しきっ

た神道界に正気を振作するため、占領軍監視の中に敢然と神道の雑誌「悠久」を刊された識見と勇気、そしてその休刊のことがしるされている。これも歴史的文献となるであろう。

四　学界状況(二)

わが神道界を代表する学術雑誌は、伊勢の「神道史研究」東京の「神道宗教」出雲の「神道学」の三種であり、国大の「国学院雑誌」はとくに「平田篤胤特輯号」を十年おきにキチンと編集して刊行している。平田学派の伝統を守る節操が見えて奥ゆかしい。昭和四十八年十一月に第七十四巻第十一号（通巻七九九号）を刊行A5二七〇ページに及ぶ大冊で平田翁百三十年祭記念出版である。この前後に奇しくも中央公論社版『日本の名著』（平田篤胤）岩波版『日本思想大系』（平田篤胤その他）が刊行された。これらが因となって昭和五十一年十一月から東京の名著出版から復刻版『修新平田篤胤全集』（全十五巻）が平田翁生誕二百年記念として発行の運びに至った。限定五〇〇部の予約出版である。

神道界が転換の時機にさしかかったという気がする。すなわち平田学の再検討を通して、これからの神道学のゆくえを展望する時期に入ったと思われるからである。

このことについて少しく管見を述べたい。それはよくいわれる原点にかえって、見直しをする必要があるという意味である。

二十歳を成人の年とし、三十歳を自立の年とすれば、自立とは一家の風を示す年頃といえる。わが行く道を決めるからである。

敗戦にまみれ占領軍の長い統治から日本が独立を回復したのは昭和二十七年四月からであった。新憲法と神道指令によって日本のワクが決められ、新教育発足によって、社会科が誕生し、教育勅語が廃止され修身科が消えた。

この中で最も深刻な影響を受けたのが明治以来の伝統を守る神祇院の廃止と、神道の宗教法人化の進展である。この結果、神道を講ずる神宮皇学館大学は廃校となり、東大文学部の神道研究室は消えて宗教学科に合併され、昭和十三年発足の東大、京大、東京文理大、広島文理大の「思想史講座」も廃止され、神道ならびに国史を担当した教授たちは、おおむね公職、教職追放にあった。

従って戦後、教育民主化の線によってできた六三三四制のトップにある新制大学も、学科構成と教授陣の面に「地すべり」的異変をきたしたこというまでもない。伝統の私大もその影響

を免かれることはできなかった。

国大の神道学科の学術雑誌『神道宗教』が創刊されたのが昭和二十三年七月である。（これより先き同年一月に神道研究雑誌「悠久」が鶴岡八幡宮内神社同攷会の名をもって発刊された。座田司氏宮司の勇断によるものであることは前にふれた）

『神道宗教』の創刊号には、今後の方向を明示する歴史的宣言が見える。第一は折口信夫博士の「発刊のことば」である。博士は昭和二十一年九月、戦前の道義研究室に代わる宗教研究室を新設し自らその主任教授に就任され、神道の学問的再建をめざし、人材の養成と研究の継続の方途を画策し、これを実行された。『神道宗教』も、この宗教研究室を母胎として神道宗教学会の神道研究「機関誌」として新生したという経緯があるから、この点に注目する必要がある。折口博士は「発刊のことば」の中で今後の方向を次のように定義づけている。

「目下、在来の倫理神道と別れて、宗教神道の地固めに勤しんでいる我々の作業は、記念すべき労苦として、必、後世からは見られることになるでしょう」

すなわち、戦前の「倫理神道」は終わりを告げた。これから新しい「宗教神道」の時代がはじまる、という意気込みが烈々と根柢に見えるからである。この宣言の通り、戦後の学風はおしなべて折口博士あるいは柳田国男氏の民俗学的傾向に変容し、上からの神道に対して下からの神道を開拓しようとし、この領域では、それから長足の進歩を果たしたといってよい。これを著作の面で実証する記念史的道標が、堀一郎博士の大著『我が国民間信仰史の研究』（上下二巻A5一四八八ページ）である。「民間信仰の発生と成立の変遷、類型を辿って民族信仰の原初形態を実証する学問的労作」と推称され、学士院賞を受けた名著であるこというまでもない。

『神道宗教』創刊号に堀一郎博士は「神道研究の方法について」と題して新しい提言が見える。その要点を示すと、博士は神道は内外のあらゆる面で孤立した存在ではなく、少数の専有物でも特定人の特権的対象でもなかった。それは日本国民の幾千年にわたる生活形成のうちに発生し、成長をとげた一つの、〝信仰現象〟であるから、万人の信仰欲求の前には平等であるべき信仰対象である。ゆえに神道の研究は、この国民多数の信仰事実に基づいて実証的に、かつ機能的に推進されなければならない、とする。この前提のもとに多角的な全的把握の方法論が展開される。博士は、これを六つの領域に分ける。

㈠歴史学的方法　㈡文化史学的方法　㈢古典及び言語による研究方法　㈣民俗学的方法　㈤宗教学的方法　㈥哲学的方法

右のうち、㈠㈡㈢は伝統の研究方法をさすが、これにつづく㈣㈤㈥の領域に博士の指向した新しい展望がうかがわれる。㈣㈤は東大宗教学科ですでに始った研究の分野であるが、㈥は今後の開拓さるべき新分野をさしている。博士の言をかりると、

「我々は西洋哲学及び東洋哲学の体系とその展開の跡に深い関心を払い、神道信仰の事実に基礎を置く神道理論の独自の体系を樹立する方向に努力せねばならぬ」ということになろう。そこで理論として「これからの神道のゆくえ」について大胆卒直な提言を発している。すなわち、

「将来の神道学がこれらの（従来の）成果を常に敏感に受け容れて自己を日に新たに発展せしめると共に、それらの諸科学と提携し、方法を併存せしめるだけではなくて、能うべくんば、それらの粋を採り、順序を按じて、別に神道学独自の綜合的方法が樹立せられねばならないのである」

思えば、『神道宗教』の創刊は昭和二十三年七月、それからざっと三十年を経過したわけであるが、神道宗教学会は果してこの間に、右の提言に応え得るだけの〝神道学独自の綜合的な体系〟を確立したといえるだろうか。

昭和四十一年十二月、神道宗教学会（会長西角井正慶氏）は本会創立二十周年を記念して、特集号「神道の根本問題」（A5一九四ページ）を発行した。二十名の執筆者の労作である。巻頭に小野祖教博士の痛切な「盲点の開発と定義」と題する文章がある。

「神道は古い宗教である。しかし乍ら神道学は新らしい。総じていえば、国学によって開発された国語学的神道研究と史学的神道研究とが可成りの程度に発達を遂げたが、方法論としては、訓詁風の教典解釈と、考証学風の文献史の域をぬけ出していない。（中略）

神道学では、知識を綜合するという仕事が、まだ殆ど為されていない。集成という点については、古人も心をとめていたが、群書類従に象徴される書籍の集成、古事類苑に象徴される分類資料集、或は神道大辞典、この種の集成は一種の綜合ではあるが、体系的に整理されたものではない。私は第一の基礎作業として、知識の集成から、更に質的な考察を進めて、十分な分析や、分類の上に組み立てられた、体系をもつ綜合知識とする事が必要であることを痛感している」

この状況が創立二十周年の時点に立つ指摘であった。それから十年を経過して、創立三十周年の特集号「神道の根本問題」（第二輯）が今春発行された。創立三十周年を経過して、「根

本問題とは何か」を探究する段階である。従来よく指摘された言葉だが、「神道史学は成立するが、神道学（理論）は成立せぬ」という定評がある。随分人を喰った発言と思うが、戦後の神道界は、神道史学と神道民俗学が主流をなし、宗教学的方法・哲学的方法による開発が遅れているのを指摘しなければならぬ。

理想社から刊行されている雑誌に『理想』（月刊）というのがあり、岩波の『思想』とならんで伝統のある雑誌だが、その『理想』（五十二年一月号）は新年号に〝実存哲学の終焉〟と題する特集の論文・座談などをのせている。実存主義あるいは実存哲学は、戦後の哲学界をリードした哲学思想だったが、今やそれが自己解体を始めたかどうか、哲学界の〝勇み足〟のようにも見えるが、現代の状況察知には参考になる。それとならんで哲学者久松真一氏の著作集の第四巻「茶道の哲学」がよく読まれ、一方イマヌエル・スェデンボルグ著作集（既刊三十六冊・静思社版）の刊行も現代の精神状況をよく写していると思う。これに匹敵できる日本の思想家・宗教家といえば幕末の平田篤胤とその門流の業績であろう。昨秋平田篤胤の生誕二百年記念出版『修新平田篤胤全集』（復刻版・全十五巻）が全集刊行会編（名著出版刊）で発行された。「近年、柳田国男・折口信夫の学問的源流として再評価の脚光をあび、無限のひろがりを蔵する国学の大人」とキャッチ・フレーズに見えるが、第一、第二回配本の順序でいわゆる再評価の意味がくみとれる。第一回が第八巻（神道三・道教一）第二回が第九巻（道教二付神仙）であって、第一巻～第五巻（古史一～五）第六巻（神道一）第七巻（神道二）が後回しになっている。

エマーソンはスェデンボルグを評して「文献の大河、巨像の一つ。凡庸な学者の全集団もこれに匹敵できない巨大な魂」と言ったが、この評は平田篤胤にもあてはまる。篤胤は巨像の一人であったが、その業績はあまりに広汎にすぎて未完成に終った。その未完成を補足し、その全貌を示す仕事が残されていることを忘れてはなるまい。そしてその巨像の精神を継承し、近代化することが国大の神道宗教学会あるいは日本文化研究所の今後の仕事になるのではなかろうか。これはいわゆる近世の国学を、世界大に拡充する日本学の建設にたち向う姿勢を必要とすることとなる。篤胤の門流が皇典講究所の基盤をつくったからである。それにしても篤胤の主著『古史伝』の研究や、『印度蔵志』並『同稿』『密法修事部類稿』『天朝無窮暦』（前・後篇）『太皞古易伝』『金匱玉函経解』など天文・暦学・易・医学等、関連諸学の研究がなされていない。平田篤胤百三十年

祭にさいし、新しい機運が生れてきた。これは主に民俗学的手法による篤胤の道教・神仙にかんする面にスポットをあてるのが目標であった。戦後「草莽の国学」という名称で伊東多三郎氏らがこの面の開発を行なったのが注目されるが、これも新しい発想である。しかし平田学の再検討がたんに玄学の領域の開発に止まるのでは完全ではない。篤胤という学界の巨像の全体像にメスをいれ、これを綜合して平田学の精神を発見するのが今後の方向であろう。

「名著出版」の復刻版全集は、生誕二百年の記念出版と銘うっているが、これとならんでこれよりさき平田学研究の基本となる『平田篤胤の著述目録』―研究と復刻―（A5一〇八ページ）が皇大の谷省吾氏によって皇大出版部から刊行されたことを記しておきたい。多年にわたる緻密な研究から生れた著述目録の決定版である。

これとならんで『気吹屋門人帳』の公刊が久しく期待されたが、この中間報告ともいうべき『気吹屋門人帳小考 ―門人の年次別・国別分布を中心に―』と題する論文と「伊吹舎門人の年次別・国別分布一覧表」（新聞紙二ページ大の一覧表）とが、昭和五十年一月『皇大紀要』第十三輯に収録されて刊行された。『気吹屋門人帳』ははやく『国学者伝記集成』（第二巻）に収録されてよく知られているが、決定版とはいえない。原本は東京代々木の平田家に秘蔵され、別に無窮会神習文庫に井上頼圀博士の書き入れのある同門人帳がある。博士はいわゆる没後の門人で明治版『平田篤胤全集』十五巻の編集責任者である。してみれば、博士の書入れ本は権威のある門人帳としなければならぬ。かくて平田家の原本と神習文庫本とを厳密に校訂して完璧な門人帳を作ることが先決条件となる。この整理事業中に、門人の分布の発展に着目してそれを一覧表にまとめたのが『小考』と題する中間報告である。二二ページにわたる貴重な紹介である。「伊吹屋門人帳の研究」と申して差支えない。

以上の研究は三木教授と谷教授とが共同して黙々従事された一大労作であって、篤胤という巨人の本格的研究を究明する上に、必要不可欠の基礎作業といえるであろう。この二人の教授が連絡をとりつつ共同して作業にあたったという事実にわれわれは、深い敬意を表したい。この巨人の全体像の究明は、少なくとも八人以上の専門分野からの協力が必要であると思われるが、各個バラバラの探求ではとうてい全貌を明らかにすることはできず、さらにこの方法に学んでこれを近代化し、これからの神道学に寄与すべき必要のあることを付記しておきたい。加藤玄智博士はティーレ教授の比較宗教史学に学んでこれをさ

らに展開して、独自の加藤宗教学を樹立したことを、ここでもう一度思いおこしてみよう。平田篤胤とその門流の残した足跡はあまりにも大きく、近代の文化史、神道史、教育史はこれを外して進めるわけにはゆかぬ。われわれは、平田翁のとった研究方法は、神道を主体にすえた比較宗教学の先駆者だったことを思うのである。今日の神社神道、教派神道のいずれをとってみても、その恩恵を蒙らざるはないと申してよい。〃平田学の再検討〃とはこれを意味する。今後の展望としてこのことを深く期待したいのである。

（昭和五十二年一月稿）

〔国学研究叢書〕

第一編	招魂社成立史の研究	小林健三 照沼好文	680円	
第二編	二宮尊徳仕法の研究	岩崎敏夫	680円	品切
第三編	教育力としての国学	小林健三	780円	
第四編	矢野玄道の本教学	越智通敏	680円	
第五編	黙霖・松陰往復書翰	川上喜蔵	780円	品切
第六編	新国史眼	新見吉治	780円	
第七編	神道指令の超克	久保田収	780円	
第八編	大壑平田篤胤傳	伊藤裕	980円	
第九編	栗田寛の研究	照沼好文	1,500円	

東京都千代田区神田錦町1—4—4
〒101 振替東京 3—136535 錦正社